



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ゆかた着装を含むきもの文化学習を軸とした衣生活領域の教育プログラムの開発(論文要旨)
Author(s)	大矢,幸江
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2309/150391
Publisher	
Rights	

氏 名 : 大矢 幸江
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 315 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 9 月 25 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : ゆかた着装を含むきもの文化学習を軸とした衣生活領域の
教育プログラムの開発
論文審査委員 : (主査) 教授 薩本 弥生
(副査) 教授 堀内 かおる 教授 川端 博子
准教授 清水 由紀 教授 谷田貝 麻美子

学位論文要旨

現代のきものは、日常着の洋装化により生活の中で身近なものではなくなり、若者の興味関心が薄れ、きもの文化の継承が困難になっている。また、若者の被服消費のファストファッション依存・短サイクルの消費行動の実態が課題となっている。よって、学校教育で、生徒たちに、きもの文化への興味関心を高め、衣生活における環境配慮意識を育むための教育が必要であると考えられる。そこで、本研究では、ゆかた着装を含むきもの文化の学習を軸にした授業に、環境配慮型衣生活を学ぶ授業を加えた授業プログラムと、教員研修を合わせた教育プログラムを考案し、授業実践し、授業前後のアンケート調査の分析により、その効果を検証することを目的とした。

第 2 章では、中学校や高校でゆかた着装と着装後にワークを行う授業を実践し、ゆかた着装がきもの文化への興味関心を高める効果があるか、着装後のワークの有無、ワークの内容による効果に違いがあるかを比較検討した。その結果、ゆかた着装体験がきもの文化への興味関心を高める効果があることが明らかとなった。また、着装後ワークの実践がある方がより興味関心を高め、ワーク内容としては、着装を味わい、きもの独自の立ち居振る舞いや所作を意識する時間を設けることが、きもの文化への興味関心を高めることに重要であることが示された。

第 3 章では、きものの製作を通して縫製技能やきものの構成を学ぶことのできる、ミニチュアゆかた製作の授業、及びゆかた着装を含むきもの文化の授業を実践した。授業では、各班にタブレット端末を配布して、「ミニチュアゆかた製作」e-learning 教材を用いた ICT 教育の実践を行った。縫製面、知識面の学習効果とともに、きもの文化への興味関心に及ぼす効果を検証した。その結果、基礎縫いは、ほぼ習得ができているが、和裁の縫い方や知識に関しては十分に定着していないことが明らかとなった。しかし、基礎縫いを習得し、和裁の縫い方を繰り返し練習することにより技能が向上し、きもの名称等の理解にも効果が見られた。生徒は、ミニチュアゆかたを完成させることにより、達成感と満足感を感じるとともに、昔の人の苦勞を知り、尊敬の念を抱くことが示された。本実践による、きもの文化への興味関心を深める効果が明らかとなった。

第 4 章では、ゆかた着装の授業と、現代の衣生活の課題である環境に配慮した衣生活授業を、共通する「もったいない精神」でつなげ、一連の授業として実践した。ゆかた着装によりきもの文化への関心が高まった生徒に、昔の日本人の生活にあったモノを大切に扱う精神を、現代の衣生活に生かすこと、環境に配慮する衣生活について考えさせた。一連の授業実践による、きもの

文化への興味関心を高め、環境配慮衣生活意識を育む効果について検証した。その結果、ゆかた着
装により、きもの文化への興味関心を高め、きもの繰り返しにある「もったいない精神」の価値
を理解することが示された。その後環境配慮型衣生活について学習することにより、衣生活が環
境へ及ぼす影響を知り、環境に配慮した衣生活の重要性を意識することが明らかとなった。

第5章では、中学校や高校でゆかたの着装授業を実施することを想定して、教員に、きものに関
する知識やゆかたの着装技能に対する自信を高めさせるための講義と、着装実習を含む研修を実施
した。きもの知識や技能といった教員側の側面と、教材やアシスタント等の教育環境の側面から
現状を分析すること、授業導入に向けての課題について検討した。その結果、教員の側面からは、
きもの文化に関する知識やゆかた着装技能への自信の向上が、ゆかた着装を授業に導入する意欲を
高めること、教育環境の側面からは、アシスタントやゆかたなどの教材不足が、授業導入をしない
直接の要因ではなく、授業実践例や家庭科の授業で扱う意義、授業の有用性を理解することが、授
業導入意欲につながることを明らかとなった。

第6章では、第2章～第5章までの検証結果をもとに、教員の意欲や能力の形成を促すための「教
員研修」と、生徒に授業実践を行うための「授業プログラム」を合わせた、教育プログラムを提案
した(図1)。授業プログラムを支えるシステムとしてPDCAサイクルの手法を用いた。4つの段階
がサイクルとしてスパイラルアップされることによって、授業プログラムが継続的に改善されてい
くと考えられる。教員研修では、授業内容の充実に貢献できるように、研修で教員に身につけさせ
たい力を3つ挙げた。授業プログラムでは、「ゆかたの着装」を授業プログラムの核にして、ゆかた
着装の前または後に行う授業プログラム3種「着装後ワーク」「ミニチュアゆかた製作」「環境配慮
衣生活」を提案し、検証によって明らかとなった効果を「生徒に身につけさせたい力」として示し
た。これらの実践は、きもの文化への興味関心を高めること、環境配慮衣生活意識を育むことを目
的としている。本研究により、教育プログラムとして効果があることが実証された。

今後、一層、異なる文化との共存や国際協力の必要性が高まる中、生徒には、日本人として伝統
や文化に尊敬の念を持ち、日本人としての誇りや自信、アイデンティティーを持つことや、環境共
生意識を持ち、持続可能な社会に向けての意識を確立することが重要となってくる。本授業プログ
ラムの実践は、生徒に日本の伝統文化への造詣を深める契機となり、将来的には現代社会にある課
題に関心を深め、常に能動的に学ぶ姿勢や視野の広い人材を育成することにつながると思われる。

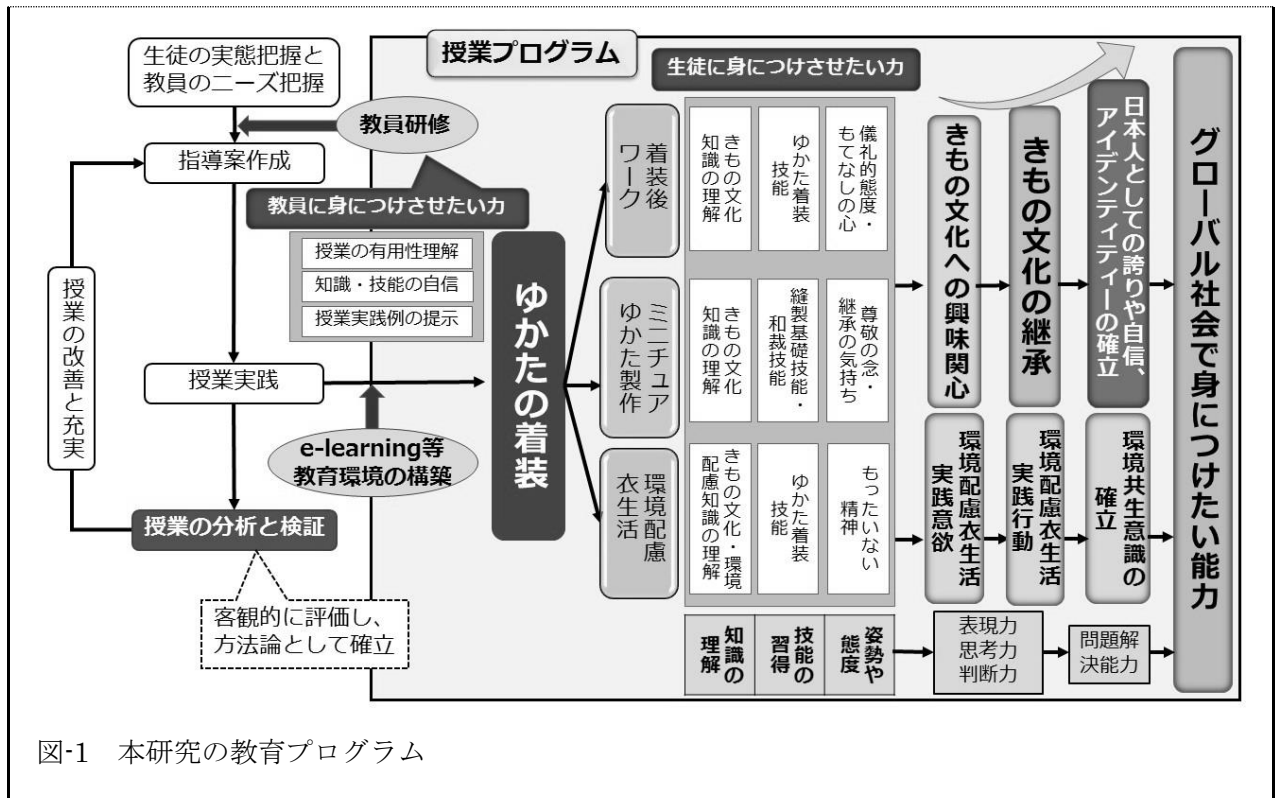


図-1 本研究の教育プログラム